

女子青年のライフコースとアイデンティティ発達に 関する日中比較研究

岡本 祐子
(2000年9月30日受理)

A Comparative Study on Life Course and Identity Development of Japanese and Chinese Women in Adolescence

Yuko Okamoto

The purposes of the present study were ① to analyze the types and characteristics of identity formation from the view points of future planning, commitment to vocation, marriage, and child-rearing, ② to investigate the relationship among these identity-formation types above and the level of identity achievement, sex-role, and psychological well-being, and ③ to discuss the differences of the characteristics of identity formation between Japanese and Chinese adolescents in comparison with these data.

The data was obtained through questionnaire distributed to 312 university girl students (176 from Hiroshima University, and 136 from Beijing Normal University).

Main results were the followings:

1. 65% of the subjects were evaluated as "Identity Achiever", and the importance of vocation for identity achievement was well recognized by both Japanese and Chinese students.
2. Japanese students considered that marriage and child-rearing were more important for their identity than Chinese students. It was suggested that there was the difference of the concepts of "independence" between Japan and China.
3. There was no differences in the level of identity achievement, but Chinese women showed higher scores on masculinity, femininity and humanity than Japanese women. These result suggested that Chinese women experienced less conflicts between personal identity and gender identity.

Key Words: Identity development, Adolescence, Comparative Study between Japan and China.

キーワード：アイデンティティ発達、女子青年、日中比較研究

問題および目的

長寿化・少子化によるライフサイクルの変化と生き方の多様化にともなう、日本人女性のライフコースは、ここ20～30年の間に大きく変化した。職業・家庭両立型、中断再就職型、専業主婦型、さらにシングル型、ディンクス (DINKS) 型など、日本の成人女性のライフスタイルは多様化し、主体的に選択できる可能性や幅は広がったが、どの道を選択したにせよ、アイデンティティの葛藤や危機が存在している (岡本, 1994a)。

さらにまた、アイデンティティ形成期にあたる青年期の女性には、社会から要求される女性性と、女性らしさにこだわらずアイデンティティを確立したいという女子青年本人の内的欲求の間に大きな葛藤が見られる。

一方、中国では、既婚女性も職業をもつことがきわめて一般的であり、大多数の女性が両立型のライフスタイルを有している。

青年期のアイデンティティ形成に関しては、Erikson (1950) 以来、膨大な数の研究が行われている (鏝・宮下・岡本, 1995, 1997, 1998, 1999)。その中で、女子青年のアイデンティティ形成には、男子青年とは異なる特質が見られることが指摘されている。例えば、次のような知見は、女性のアイデンティティ形成を考察する上で重要である。

1. 男性の場合は、アイデンティティ確立の後に、親密性のテーマが問題となるのに対して、女性の場合は、両者が並行して進行する。つまり、女性は、親密な関係をもつことによってアイデンティティがより確

かなものとなる (Josselson, 1973)。

2. 女性の場合は、職業やイデオロギーの領域での自己探求や主体的選択という男性型経路によるアイデンティティ形成のみでなく、性や結婚など関係性に直接かわる領域での模索や決断という女性型経路、あるいは両方の領域を通しての両性型経路のいずれによっても、アイデンティティ形成が行われる (Hodgson & Fisher, 1979)。

3. 女性の場合は、伝統型 (結婚、出産後は専業主婦になるタイプ)、新伝統型 (結婚、出産後は専業主婦になるが、子育て後、再び職業に就くタイプ)、非伝統型 (結婚、出産にかかわらず、職業をもちつづけるタイプ) というライフスタイルによって、ライフサイクルの各時期におけるアイデンティティの感覚が異なっている (O'Connell, 1976)。

これらは、女子青年が、ジェンダー・アイデンティティと個としてのアイデンティティの間の葛藤を少なからず体験していること、つまり、社会から要請される女性性と女性らしさにこだわらず、自分らしいアイデンティティを確立したいという女子青年本人の内的欲求の間に葛藤が見られることを示唆している。

このジェンダーと一個の人間としての自分らしさの間の葛藤は、性役割分業観が未だ社会の至るところに見られ、成人期のライフスタイルが男女でかなり異なる日本の文化特有のものなのであろうか。中国のように、成人女性も就業することが当然のこととされ、ほとんどの女性が家庭と職業を両立させている社会・文化の中では、女子青年のアイデンティティ形成は、どのように行われるのであろうか。

文化やライフスタイルの相違が、女性のアイデンティティ発達にどのような影響を及ぼすのかという問題は、きわめて重要な課題であるにもかかわらず、中国と日本の比較研究は、これまで行われていない。そこで本研究は、次の3点について検討することを目的とした。

1. 青年期のアイデンティティ形成に関わる諸領域 (進路選択の仕方、職業をもつことへの態度と意味づけ、結婚への態度と意味づけ、子どもを育てることへの態度と意味づけ、将来のライフスタイル) の意志決定の仕方についての分析と類型化を行う。
2. 1.の類型と、性役割特性・アイデンティティ達成度・精神的充足感との関連性を検討する。
3. 1.2.について、日本 (広島大学学生) と中国 (北京師範大学学生) の比較検討を行う。

方 法

- 1) 調査対象者：

次の女子大学生312名を調査対象者とした。

日本人：広島大学学部学生154名、大学院生22名、小計176名。

中国人：北京師範大学学部学生94名、大学院生42名、小計136名。

- 2) 手続き：

以下の内容からなる質問紙調査を行った。

①アイデンティティ形成の諸領域に対する意志決定：将来の進路選択、職業をもつことへの態度と意味づけ、結婚への態度と意味づけ、子どもを育てることへの態度と意味づけに関して、Marcia (1964)の提唱した4つのアイデンティティ・ステータスに該当する例文を呈示し、自分に最もよくあてはまるものを選択させた。

②将来、予測されるライフスタイル：シングル、デュオ、両立、中断再就職、専業主婦の中から、将来自分になりそうなライフスタイルを1つ選択させた。

③性役割特性：伊藤 (1978) の性役割特性尺度。

④アイデンティティ達成度：Rasmussen (1961) のアイデンティティ尺度日本語版。

⑤精神的充足感：岡本 (1994b) の精神的充足感尺度。

中国人への質問紙は、日本人を対象とした質問紙と同じものを、中国語に翻訳して用いた。日本人対象の調査は、1997年6月～1998年1月、中国人対象の調査は、1998年1月～10月に行った。

結果と考察

- (1) 青年期のアイデンティティ形成に関わる諸領域の意志決定の仕方

- 1) 進路選択の仕方

日中両国の将来の進路に対する意志決定のし方は、図1に示した。両国とも「アイデンティティ達成」群が、65%以上を占めており、自分の生き方に対して、主体的な意志決定を行っていることが示唆された。自分の生き方に対する積極的な模索と主体的な意志決定ができない「なりゆきまかせ」(アイデンティティ拡散)群は、中国人学生に比べて、日本人学生にかなり多く、約20%を占めていた。

日本人大学生を対象とした先行研究の結果に比べると、本研究の結果は、予定アイデンティティ群、アイデンティティ拡散群がかなり少なく、アイデンティティ達成群が非常に多かった。これは、今回の調査では、同世代の青年の中で相対的に知的発達レベルの高い青年を対象としたためであらうと考えられる。

中国人学生にアイデンティティ達成群が非常に多い

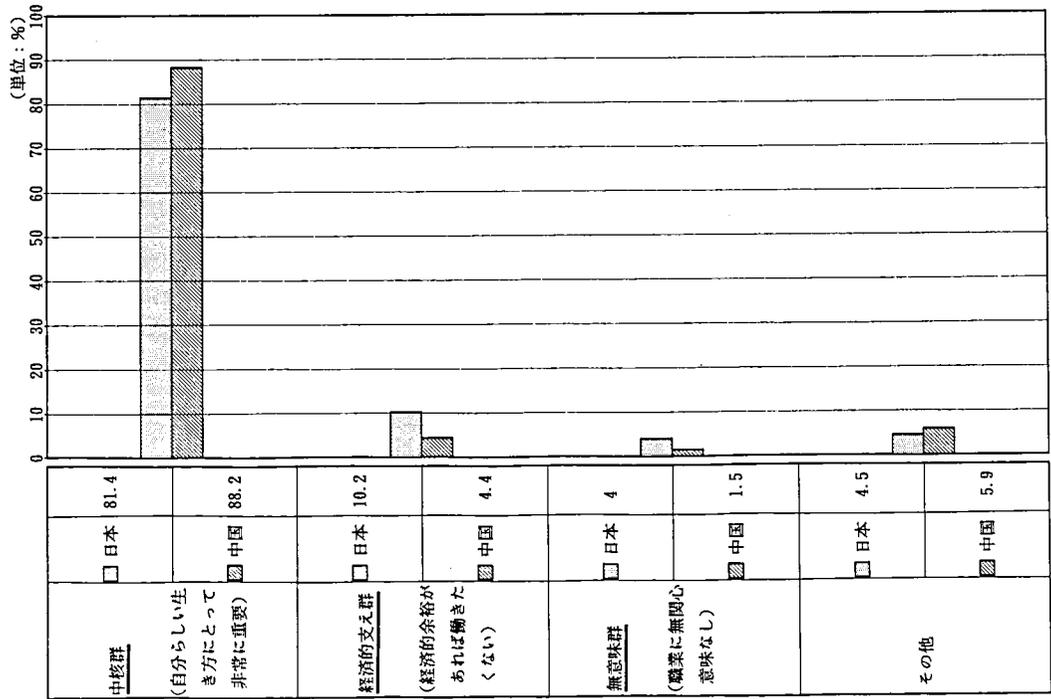


図2 「自分らしい生き方」 にとっての職業の意味

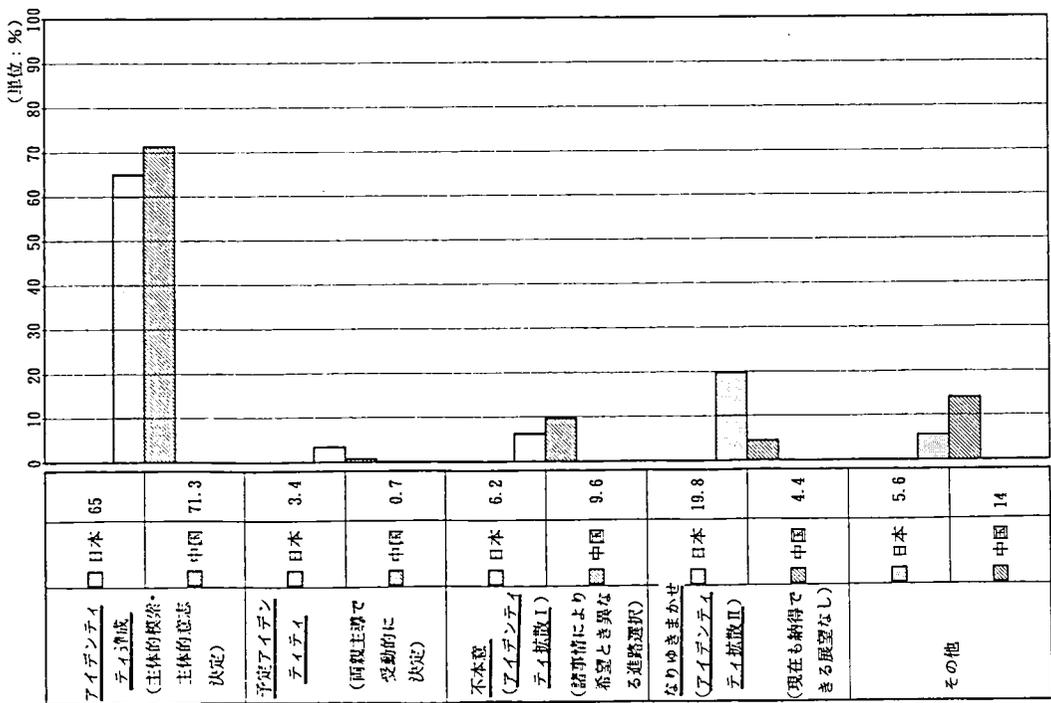


図1 将来の進路に対する意志決定のし方

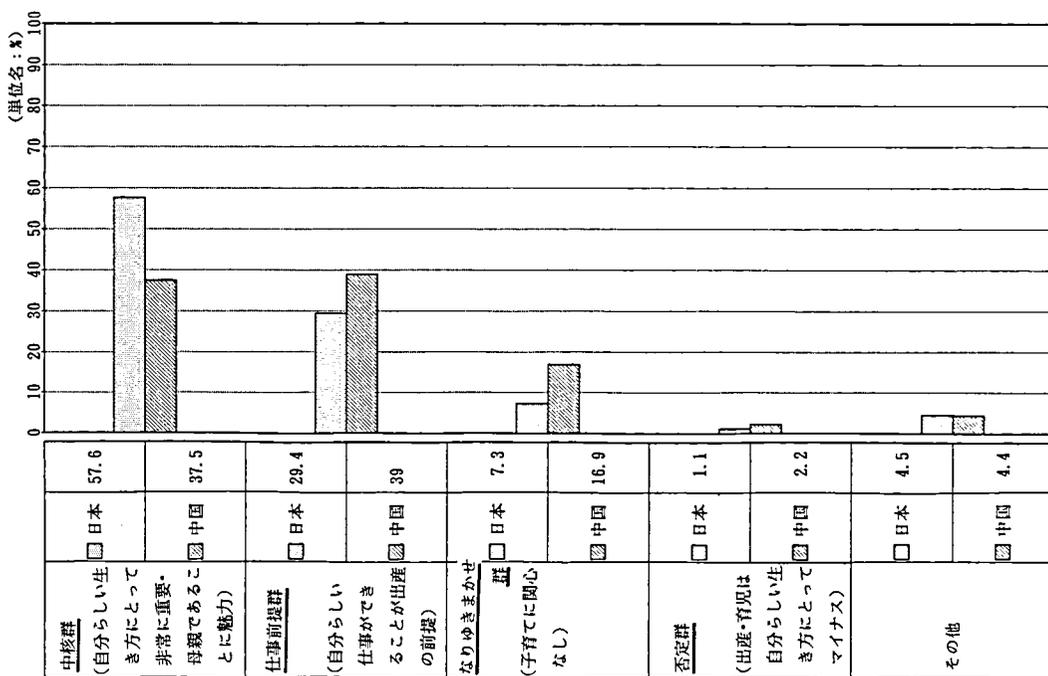


図4 「自分らしい生き方」にとっての子育ての意味

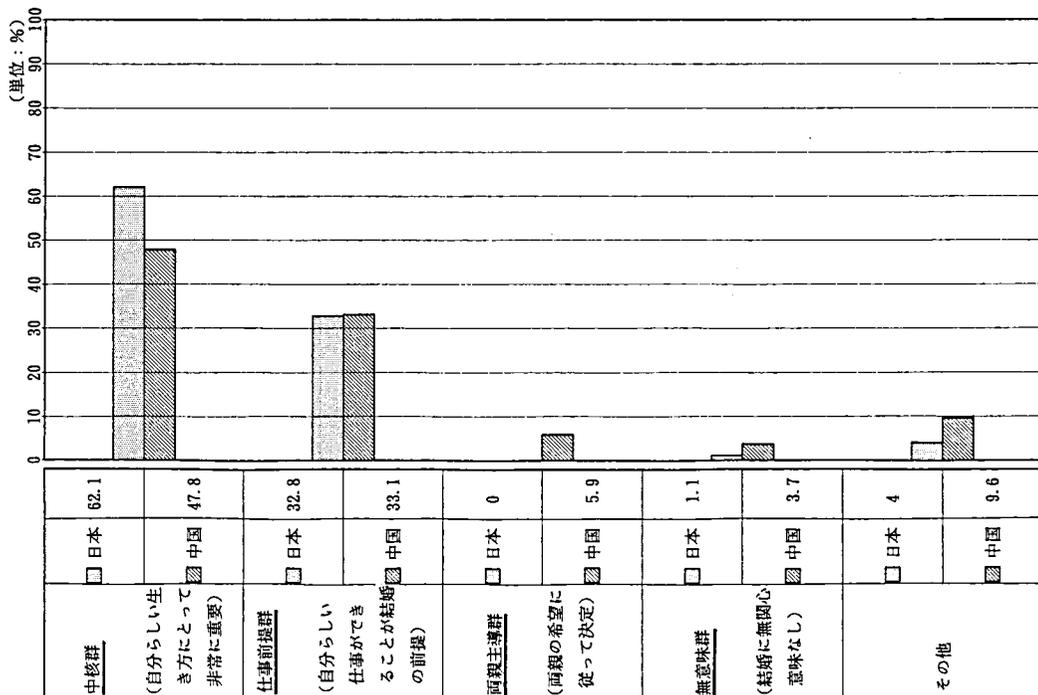


図3 「自分らしい生き方」にとっての結婚の意味

のは、中国沿岸部においてさえ、大学進学者が同世代の20%程度にすぎない中国では、同世代の青年の中で、大学生・大学院生はそれなりに主体的な意志決定が求められるからであろうと考えられる。

2) 「自分らしい生き方」にとっての職業の意味

「自分らしい生き方」、つまり主体的に納得できるアイデンティティの確立にとって職業のもつ意味については、図2に示した。

「職業は自分の人生にとって非常に重要なものであり、職業をもつことによって自分らしい生き方を達成したいと思う」とする「中核群」が、両国とも80%を越えており、女子青年のアイデンティティ形成にとって、職業の重要性が高く認識されていることが示唆された。

3) 「自分らしい生き方」にとっての結婚の意味

「自分らしい生き方」にとって結婚のもつ意味については、図3に示した。

「自分らしい生き方にとって結婚することは、大切なことである。ぜひ家庭をもった人生を送りたい」とする「中核群」が、日本人62.1%、中国人47.8%、「必ずしも結婚したいとは考えていない。自分らしい生き方や仕事ができることが結婚の前提である」とする「仕事前提群」が両国ともほぼ33%であった。職業による自己実現を志向する女性が増加してきたとはいえ、日本人青年の結婚志向性の高さが示唆された。

4) 「自分らしい生き方」にとっての子育ての意味

「自分らしい生き方」にとって子育てのもつ意味については、図4に示した。「自分の人生にとって子育ては非常に大切なことである。母親になることにとっても魅力を感じている」とする「中核群」が、日本人青年57.6%、中国人青年37.5%であり、結婚の領域と同様の傾向を示した。中国人青年では、「自分らしい生き方や仕事が継続できることが、出産の前提である」とする「仕事前提群」が39%と、日本人青年に比べて10%高く、特徴的な相違を示した。また、子育てに対して関心をもたず、なりゆきまかせであるとする者が、中国人は日本人に比べて9.6%も多いことも特徴的であった。

3)、4)の結果は、中国人と日本人の「自立」や「一人前」のとらえ方の相違を示していると考えられる。つまり、中国人は、「職業的な自立が達成されてはじめて一人前」という考え方が一般的である。それに対して、日本人女性の場合は、職業志向性はかなり高くなってきたとはいえ、「女性は、結婚して子供を産んで一人前」という暗黙の意識が、依然として残っていることが背景にあると推察される。

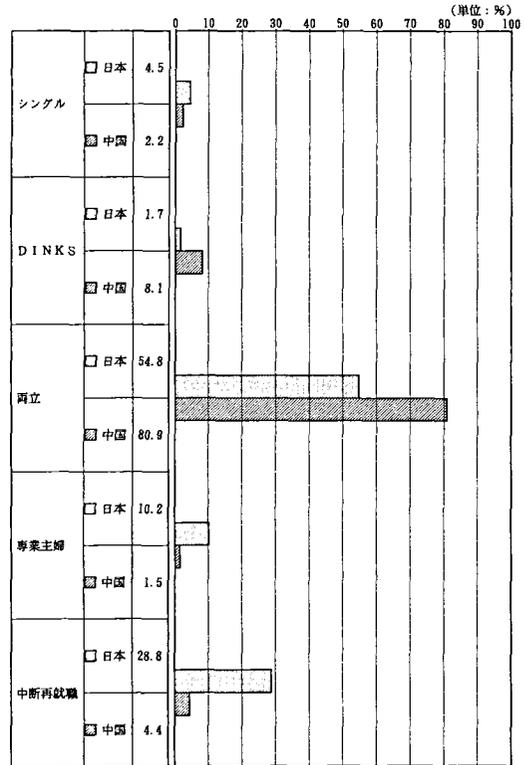


図5 将来、予測されるライフスタイル

5) 将来予測されるライフスタイル

将来、自分がとるであろうと予測されるライフスタイルは、図5に示した。両国とも「両立型」が極めて高く、特に中国人青年では80%を越えていた。日本人青年においても「両立型」は50%を越えており、経済企画庁国民生活局の調査(1987)の23.4%よりも、かなり高い数値を示した。「中断再就職型」も、日本人女性の代表的なライフスタイルの一つであるが、約3割を占めており、上記の調査(1987)とほぼ等しい値を示した。

(2) 日本人および中国人のアイデンティティ達成・精神的充足感・性役割特性の比較

次に、アイデンティティ達成度、精神的充足感、青年が認知する性役割特性を、日中両国間で検討した。表1は、日本人および中国人のアイデンティティ得点、精神的充足感得点、および性役割特性得点を示したものである。

1要因分散分析および多重比較の結果、アイデンティティ達成度においては、両国の得点の間に有意差は見られなかった。精神的充足感については、中国人大学院生群が日本人学部学生群よりも有意に高得点を示した。このようにアイデンティティ達成度および精神的充足感については、日中両国において、それほど

意味のある相違は見られなかったが、性役割特性に関しては、両国間に大きな相違が認められた。

性役割特性得点は、表1に示したように、男性性、女性性、人間性とも、中国人が日本人よりも有意に高得点を示した。この結果より、中国人学生は日本人学生よりも、男性性、女性性、人間性の特性をいずれもより高く認知しており、両性具有的であることが示された。これは、男性性、女性性がともに高く要求される職業・家庭両立型のライフスタイルが中国では一般的であるため、青年期の女性も、その方向へ向けて自己形成が行われるためであろう。さらに、日本に比べて、男女の性役割分業やライフスタイルの相違が顕著でない中国社会においては、女子青年が体験する男性的／女性的であることの葛藤が少ないためであろうと考えられる。また、日本に比べて大学進学率の低い中国社会においては、大学生はエリート集団であるため、一般青年に比べて自己評価が高く、自分の性役割特性を高く評価しているとも推察できる。

(3)各領域の志向性（意味付け）とアイデンティティ達成度

次に、(1)1)~5)に述べたそれぞれの領域の意志決定のし方と、アイデンティティ達成度の関連性を分析した。表2に示したように、両国ともほぼ同様の結果が得られた。つまり、

①進路選択におけるアイデンティティ達成群は、拡散群に比べてアイデンティティ得点が高かった。

②将来のライフスタイルにおいて、DINKS型、両立型を志向する者は、シングル型、専業主婦型よりもアイデンティティ得点が高かった。

③職業、結婚、子育ての領域に関しては、得点に有意差は見られなかった。

(4)各領域の志向性（意味付け）と精神的充足感

次に、各領域の意志決定のし方と精神的充足感との関連性を検討した。表3に示したように、両国ともほぼ同様の結果が得られた。つまり、進路選択における「アイデンティティ達成群」、職業・結婚・子育てにおける「中核群」、将来のライフスタイルにおける「両立型」が、高い精神的充足感を示した。

(3)(4)の結果より、「アイデンティティ達成」者、および、職業、結婚、子育てを自分らしい生き方にとって中核的な意味をもつ重要なことととらえている「中核群」が、高い精神的充足感を有していることは、文化の相違を越えて共通に見られることが示唆された。また、日中両国において、アイデンティティ形成にかかわる各々の領域において、「主体的選択・積極的関与」を意味する「中核群」が、精神的充足感が高かったことは、仮説どおりの結果であった。

表1 日本人および中国人のアイデンティティ得点・精神的充足感得点・性役割得点

国籍	学部/ 大学院	人数	M SD	アイデンティティ 得点	精神的充足感 得点	性役割得点		
						男性性	女性性	人間性
日本	① 学部生	154	M SD	36.36 5.60	94.61 14.48	41.34 10.80	38.95 7.74	43.10 9.17
	② 院生	22	M SD	36.41 5.25	98.32 12.00	45.55 8.39	39.19 5.58	47.36 9.03
	③ 合計	176	M SD	36.38 5.54	95.10 14.18	43.36 10.20	39.05 7.21	46.98 7.95
中国	④ 学部生	94	M SD	35.80 4.98	98.24 16.84	51.20 10.47	44.73 8.21	54.71 7.37
	⑤ 院生	42	M SD	37.64 3.27	102.14 11.38	51.98 8.80	45.32 7.91	55.35 7.39
	⑥ 合計	136	M SD	36.37 4.59	99.45 15.43	51.44 9.96	44.93 8.06	55.89 7.73
有意差検定				ns.	⑤>① *	⑥>③ * ④⑤>①**	⑥>③ * ④⑤>①** ④⑤>②*	⑥>③ * ⑤⑥>①②**

** P< 0.01, * P< 0.05

(5) 全体的考察および今後の課題

本研究から得られた主要な知見は以下のとおりである。まず、アイデンティティ達成度そのものに関しては、両国間に有意差は見られなかった。また、精神的充足感も、両国間で意味ある相違は見られず、全体的に見た限りでは、両国の女子青年の発達の相違は認められなかった。

また、進路選択や自分らしい生き方について、主体的な模索や積極的関与を行っている青年は、アイデンティティ達成度や精神的充足感が高いという仮説は、本研究の中国の女子青年においても支持され、これは文化的な差異を越えて見られる現象であることが示唆された。アイデンティティ形成にかかわる各々の領域

において、「主体的選択・積極的関与」を行っている青年が精神的充足感が高いというこの結果は、ライフサイクル全体にわたる女子教育の方向性を考える際にも重要な示唆を与えていると考えられる。つまり、精神的充足感、実存的なレベルで、いかに心理的な課題を達成しつつ充足して生きるかを意味していることから、青年期にアイデンティティ形成を主体的に行い、しっかりと納得のできる形でアイデンティティを確立することが、その後の人生の充足に関わっていると考えられる。

しかしながら、性別特性に関しては、両国間に著しい相違が認められた。性別特性については、男性性・女性性・人間性とも、中国人が日本人よりも有意に高得点を示した。この結果は、中国の女子青年は、日本

表2 各領域のタイプ別に見たアイデンティティ得点

領域	タイプ	日本人		中国人	
		N		N	
進路選択	①アイデ達成群	115	37.16	97	37.41
	②予定アイデ群	6	36.50	1	32.00
	③不本意(拡散I)群	11	35.45	13	32.77
	④なりゆきまかせ(拡散II)群	35	33.80	6	29.83
	有意差検定	①>④ *		①>③** ①>④**	
職業	①中核群	144	36.87	120	36.32
	②経済的支え群	18	35.11	6	35.17
	③無意味群	7	32.43	2	35.50
	有意差検定	ns.		ns.	
結婚	①中核群	110	37.22	65	36.54
	②仕事前提群	58	34.88	45	36.51
	③両親主導群	0	-	8	35.50
	④無意味群	2	35.00	5	34.60
	有意差検定	ns.		ns.	
子育て	①中核群	102	37.31	51	36.69
	②仕事前提群	52	35.58	53	36.25
	③なりゆきまかせ群	13	35.85	23	36.26
	④否定群	2	33.50	3	36.67
	有意差検定	ns.		ns.	
将来のライフスタイル	①シングル	8	31.50	3	28.00
	②DINKS	3	42.33	11	39.18
	③両立	97	36.71	110	36.40
	④専業主婦	18	33.89	3	34.67
	⑤中断再就職	51	37.06	6	37.17
	有意差検定	③>④ * ⑤>④ *		②>① ** ③>① *	

** P< 0.01, * P< 0.05

表3 各領域のタイプ別に見た精神的充足感得点

領域	タイプ	日本人		中国人	
		N		N	
進路選択	①アイデ達成群	115	98.34	97	102.58
	②予定アイデ群	6	93.67	1	84.00
	③不本意(拡散I)群	11	86.55	13	91.38
	④なりゆきまかせ(拡散II)群	35	87.06	6	86.00
	有意差検定	①>④ **		ns.	
職業	①中核群	144	97.23	120	100.70
	②経済的支え群	18	86.11	6	81.17
	③無意味群	7	84.86	2	80.00
	有意差検定	①>③ *		①>② *	
結婚	①中核群	110	95.55	65	100.31
	②仕事前提群	58	93.97	45	101.78
	③両親主導群	0	-	8	88.38
	④無意味群	2	108.50	5	92.80
	有意差検定	①>② *		ns.	
子育て	①中核群	102	97.76	51	101.80
	②仕事前提群	52	93.90	53	102.00
	③なりゆきまかせ群	13	92.77	23	94.78
	④否定群	2	91.50	3	64.00
	有意差検定	ns.		①②③>④ **	
将来のライフスタイル	①シングル	8	83.50	3	68.00
	②DINKS	3	96.33	11	98.18
	③両立	97	97.75	110	101.03
	④専業主婦	18	87.33	3	83.00
	⑤中断再就職	51	94.53	6	100.33
	有意差検定	③>① * ③>④ *		②>① * ③>① **	

** P< 0.01, * P< 0.05

の女子青年よりも、男らしさ・女らしさをともに高く認知していることを示している。この結果より、日本に比べて、男女のライフスタイルの相違や性役割分業・性役割期待が顕著でない中国社会においては、女子青年の「個としてのアイデンティティ」と「ジェンダー・アイデンティティ」の葛藤がより少ないと推察される。

また、「自分らしい生き方」にとっての結婚や子育ての意味に関しては、日本人青年は中国人青年に比べて、結婚および子供をもつことへの志向性が高いことから、日中両国の一人前意識の相違が明らかになった。

日本へ留学している中国人の女子学生の面接調査(松下, 1999)によれば、職業的達成への志向性の高さ、および子育てに対する親としての意識・行動には、男女の相違は見られないことが指摘されている。つまり、中国では、職業的自立と達成が男女ともに求められるため、学校教育においても等しく学業成績が重視され、男女の行動に対する評価の基準は、ほぼ同じである。女性も男性同様、社会的役割や職業を早い時期から意識し、その選択をめぐる迷いを経験するため、職業的側面がアイデンティティの主要な部分を占めている。また、中国においては、子どもを育てることに関して、父親役割に比べて母親役割が特に重視されることはない。例えば、幼い子どもを母国において、単身長期にわたって留学する女子学生の事例や、家族で日本に滞在中、母親が単身赴任し、父親が子供と同居している事例などは珍しくない(松下, 1999)。本研究で見出された、中国の女子青年のアイデンティティ形成における職業の意味付けの重さや性役割割葛藤の少なさも、このような調査結果や指摘から裏付けられるものであろう。

中国のように、男女に対する社会からの期待とそれを具体化する社会の受け皿に男女間に相違がなければ、女子青年は男性と同じような将来のライフコースを展望し、男性と同じようにアイデンティティ形成を行うことが示唆される。しかしながらこの問題は、今後、慎重に検討と考察を重ねていく必要があろう。例えば、職業・家庭両立型のライフスタイルが一般的な中国社会において、その職業や家庭役割への関与のし方や意識が男女間で全く同じであるかどうかは、定かではない。

さらに、中国社会において、時代や社会の変化にともなうアイデンティティ形成の特徴の変化の問題、つまり経済の自由化にともなう女性の生き方や意識の変容が、中国人女性のアイデンティティ発達に及ぼす影響も重要な課題である。経済の自由化にともない、中国沿海部の女性の意識は大きく変化しつつある。就労の幅の広がりにともなって、単に高い収入を得るという目的のみではなく、真の自己実現をめざす女性のアイデンティティの発達について考察することは重要で

あろう。日本においてはすでに、女性の就労や生き方選択の幅の広がりにともなう光と影は、数多く見えてきている(岡本・松下, 1994; 岡本, 1997, 1999)。また、より基本的な問題として、民族、地域、学歴等、中国の人々の多様さへの検討をはじめとして、日中両国の青年のアイデンティティ形成については、今後さらに、さまざまな角度から検討を重ねていかねばならない。

〈謝辞〉

本研究は、平成9・10・11年度文部省国際科学研究「女性のライフサイクルから見た教育課題に関する日中共同研究」(研究課題番号 国09045009、研究代表者渡部和彦)の分担研究Ⅲとして行われたものである。中国での調査の実施に際して、多大なご協力をいただいた北京師範大学 王義高教授、曾曉東講師に厚く御礼申し上げます。また、質問紙の中国語への翻訳にご協力いただいた広島大学大学院生 周 霜さんに、心より感謝いたします。

引用文献

- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York: W. W. Norton. (仁科弥生 訳 1977, 1980 *幼児期と社会* 1・2, みすず書房)
- Hodgson, J. W., & Fisher, J. L. 1979 Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 37-50.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究. *教育心理学研究*, 26, 1-11.
- Josselson, R. L. 1973 Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- 経済企画庁国民生活局 1987 *新しい女性の生き方をもとめて*. 大蔵省印刷局.
- Marcia, J. E. 1964 Determination and construct validity of ego identity status. Unpublished doctoral dissertation, The Ohio University.
- 松下美知子 1999. 文化的視点からみた成人女性の発達. 岡本祐子(編著) *女性の生涯発達とアイデンティティ*. 北大路書房, Pp.209-232.
- 岡本祐子 1994a 現代女性をとりまく状況. 岡本祐子・松下美知子(編) *女性のためのライフサイクル心理学*. 福村出版, Pp.12-21.
- 岡本祐子 1994b 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究. 風間書房.
- 岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学. ナカニシヤ出版.

- 岡本祐子(編著)1999 女性の生涯発達とアイデンティティ：個としての発達・かかわりの中での成熟。北大路書房。
- 岡本祐子・松下美知子(編)1994 女性のためのライフサイクル心理学。福村出版。
- O'Connell, A. N. 1976 The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional, neotraditional, and nontraditional women. *Journal of Personality*, 44, 675-688.
- Rasmussen, J. E. 1961 An experimental approach to the concepts of ego identity as related to character disorder. Unpublished doctoral dissertation, The American University.
- 鎌幹八郎・山本力・宮下一博 1984 アイデンティティ研究の展望Ⅰ。ナカニシヤ出版。
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1995a アイデンティティ研究の展望Ⅱ。ナカニシヤ出版。
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1995b アイデンティティ研究の展望Ⅲ。ナカニシヤ出版。
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1997 アイデンティティ研究の展望Ⅳ。ナカニシヤ出版。
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1998 アイデンティティ研究の展望Ⅴ-1。ナカニシヤ出版。
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1999 アイデンティティ研究の展望Ⅴ-2。ナカニシヤ出版。